

## イタリア語における狭義の再帰動詞と形式的再帰動詞は他動詞なのか

山本 真司

## 1. はじめに

本稿は、イタリア語の再帰動詞の用法の解釈に関して、今まであまり深く追及されてこなかった幾つかの点を指摘し、ささやかな問題提起を試みようとするものである。その中心となるのは、「再帰動詞の構文において直接目的語が認められる場合、動詞は他動詞であると言えるのであろうか」という問いである。

イタリア語の再帰動詞の構文の幾つかは、直接目的語を従えて用いられる。この直接目的語は、まさに再帰代名詞そのもので表される「自分自身」であったり（「自分の姿を鏡に映してみる」*guardarsi allo specchio*<sup>1</sup>）、あるいは、自分自身の一部であったり（「（自分の）顔を洗う」*lavarsi la faccia*）、あるいは自分の外部にあるが何らかの形で自分の利害と結びついているものであったり（「（自分で食べるために）サンドイッチを作る」*farsi un panino*）など、さまざまであるが、それらが少なくとも（意味的には）動詞の直接目的語であることは疑いなく見える。では、直接目的語を従えているということならば、これらの再帰動詞は他動詞だと考えていいのだろうか。

この問いは、より正確には、「もし、これらの再帰動詞は他動詞だと言えるならば、どの程度まで他動詞的であるのだろうか」と言うべきであろう。現在の言語研究の理論は、他動詞と自動詞との違いを絶対的な区別と考えるよりも、むしろ両者の間には連続的・段階的の変化を認める傾向にあるように思われるからである。<sup>2</sup> ただし、本稿は、いわゆる他動詞性の度合いを決定するための特定の理論・仮説を、必ずしも前提とはしていない。

ともあれ、すでに多くの研究がなされているイタリア語の再帰動詞の問題は、他動詞と自動詞の両方の特徴の兼ね合いという観点からも、興味深いものであると思われる。

今回取り扱うのは、再帰動詞の中でも、狭義の再帰を表わす用法「自分自身を...する」

<sup>1</sup> 以下、イタリア語の用例のうち、日常よく使われる表現については、特に引用元を記していないものもあるが、その場合にも、母語話者によるチェックを行なってイタリア語として可能な文であることを確かめてある。また、引用元を明記してあるインターネットからの引用についても同様である。なお、ネイティブ・スピーカーとしてイタリア語の用例をチェックして下さった、Michela Campaner 氏（本学大学院博士後期課程所属）に感謝申し上げます。

<sup>2</sup> この事情を簡潔に解説したものに、角田 2007 がある。角田は、意味的な側面からの他動詞性を規定した Hopper - Tompson の研究（他動詞と自動詞の連続性・峻別不可能性という考えを打ち出し、他動詞性の高さ・低さを図るための 10 あまりの特徴を打ち出した）に注目し、これにさまざまな批判や修正が加えられてきた経緯を振り返っている。

— 以下、「狭義の再帰動詞」と呼ぶことにする (ただし我が国のイタリア語教科書の多くでは「本質的再帰動詞」と呼ばれている) — と、(さまざまな意味の) 与格の再帰代名詞を伴う再帰動詞の用法「自分自身に・のために ... する」(形式的再帰動詞) の二種類である。いわゆる「代名動詞」<sup>3</sup> — 例えば *spegnersi* 「消える」(*si spegne la luce all'improvviso* 「明りが突然消える」[http://it.wikiquote.org/wiki/Laura\\_Tangorra](http://it.wikiquote.org/wiki/Laura_Tangorra)) のような — は、再帰代名詞にもはや「自分自身」という語彙的意味が認められず、単なる自動詞化・中動態化のしるしに過ぎないと思われるので、本稿の主たる論筋に直接は関係ないとみなし、参照が必要される際に援用的にしか取り上げないであろう。また、*Si stanno guardando da un'ora* 「彼らは2時間前からずっとにらみ合っている」(Salvi - Vanelli 2004, p.206) のような相互的再帰動詞「お互いに ... し合う」も、厳密な意味では「自分自身」を動作の対象としていないという点から、考察の対象外とする。

## 2. 狭義の再帰動詞

イタリア語文法の説明では、狭義の再帰動詞「自分自身を ... する」を説明するために、再帰代名詞「自分自身」が対格 (あるいは直接目的語) になっている、あるいは、「... する」の直接目的語の部分が主語と同じものを指す人称代名詞「自分自身」である、という言い方がよくなされる。ということは、狭義の再帰動詞の構文は、少なくとも出発点においては、「... をする」という他動詞の構文であるとの考えがあるということになる。しかし、それと同時に、狭義の再帰動詞の構文は他動詞の構文とは異なると見なさざるを得ない点もある。その1つは、複合時制形の形成の際の助動詞の選択である。

よく知られているように、イタリア語では、複合時制形(完了諸形)の形成法に、他動詞・自動詞の区別が顕著に影響を及ぼす。簡単に言うと、他動詞の構文の場合には、助動詞として「持つ」*avere* が選択される。そして、助動詞として「である」*essere* が用いられるのは、(本稿でこれから扱うようなケースを除けば) 原則として自動詞の構文に限られる。<sup>4</sup> これを態の観点から言い直すと、能動態<sup>5</sup> の構文の場合には、助動詞として「持つ」*avere* が選択されるが、それ以外の態 (受動態や中動態) の構文では、助動詞として「である」*essere* が用いられるということになる。

---

<sup>3</sup> いくつかのロマンス語における文法用語の慣習とは異なり、(日本語の) イタリア語文法の用語の慣習に従って、本稿では、「代名動詞」という名称を「再帰動詞」とは異なった意味で用いる。

<sup>4</sup> 念のために言い添えると、自動詞の場合には *avere* が選択されないということではない。つまり、自動詞には *avere* を選択する場合と *essere* を選択するものがあるが、他動詞の場合には、必ず *avere* が選択されるということである。

<sup>5</sup> 自動詞の構文のうち、非対格的なものは、中動態の仲間に入れる、という前提で述べるとこのような言い方になる。

さて、狭義の再帰動詞「自分自身を ... する」の場合はどうであろうか。実は、複合時制の助動詞としては、*essere* が選択される：

(1) **mi lavo.** 「私は体を [自分自身を] 洗う」

me I-wash

(mi 人称代名詞一人称単数対格 [ここでは再帰代名詞] , lavo 「私は洗う」 動詞 lavare 「洗う」の直説法現在1人称単数, la 定冠詞女性単数形)

(2) **mi sono lavato.** 「私は体を [自分自身を] 洗った」

me I-am washed

(mi 人称代名詞一人称単数対格 [ここでは再帰代名詞], sono 「私は ... である」 動詞 essere 「... である」の直説法現在1人称単数 [ここでは助動詞として機能], lavato 動詞 lavare 「洗う」の過去分詞男性単数)

ただし、この現象は、直接目的語が主語と等しいものであるという意味上の関係が原因となっているとは言えないようである。というのは、「私自身を」の部分が、接語形の代名詞ではなくて強形の代名詞で表されている場合、複合時制形の助動詞としては、*avere* が選択されるからである：

(3) **lavo me stesso.** 「私は体を [自分自身を] 洗う」

I-wash me myself

([http://www.mauriziopistone.it/testi/discussioni/gramm05\\_forma\\_riflessiva.html](http://www.mauriziopistone.it/testi/discussioni/gramm05_forma_riflessiva.html))

(lavo 「私は洗う」 動詞 lavare 「洗う」の直説法現在1人称単数, me 人称代名詞一人称単数対格強形 [ここでは再帰代名詞], stesso 「自身」 形容詞男性単数形, しばしば再帰代名詞を強調するのに使われる)

(4) **ho lavato me stesso.** 「私は体を [自分自身を] 洗った」

I-have washed me myself

([http://www.mauriziopistone.it/testi/discussioni/gramm05\\_ausiliare\\_riflessivo.html](http://www.mauriziopistone.it/testi/discussioni/gramm05_ausiliare_riflessivo.html))

(ho 「私は ... を持つ」 動詞 avere 「持つ」の直説法現在1人称単数 [ここでは助動詞], lavato 動詞 lavare 「洗う」の過去分詞男性単数, me 人称代名詞一人称単数対格強形 [ここでは再帰代名詞], stesso 「自身」 男性単数形, しばしば再帰代名詞を強調するのに使われる)

したがって、このような助動詞 *essere* の選択は、再帰代名詞が接語形であるという点に依存していると言えよう。動詞に対して接語であるということは、動詞と一体となって一語になってしまっていること、あるいは、動詞の中に取り込まれて動詞と一体となってしまっていること、と解釈できる。したがって、この場合、意味の上ではともあれ、形態論的・統語論的には、動詞と再帰代名詞が結びついて一語の動詞のように振る舞うとしても

不思議はないであろう。こうして、少なくとも再帰代名詞の接語形が使われている時に限って言えば、助動詞の選択は、狭義の再帰動詞の構文が、他動詞の構文、また、能動態の構文とは異なっていることを示している。

能動態や受動態とは区別された、「再帰」という態を設定するかどうかについて、イタリア語の伝統的な諸文法の立場は一致していない。<sup>6</sup>しかし、自動詞・他動詞という区分とについて言えば、より現代的な文法理論（関係文法、GB理論、ミニマリスト理論など）の立場からは、狭義の再帰動詞は単なる直接目的語を伴った他動詞なのではなく、そこでは一種の自動詞化が起きている（つまり、動詞と再帰代名詞が一緒になって1つの動詞となっている<sup>7</sup>）のだ、という意見が出てきているようである。

生成文法の立場からは、例えば最近の研究を挙げれば、「この二つの事実は、再帰代名詞クリティックが接語化する動詞が統語的に自動詞のようなふるまいを示すということの意味する。つまり、再帰代名詞クリティックが動詞に接語化した段階で、動詞のカテゴリーを決定する要素である *v* の持つ素性を他動詞から自動詞に変えると考えられる。本研究では、この操作が再帰代名詞クリティックと動詞との同一指標付けによってなされると考える。これにより、再帰代名詞クリティックと動詞があたかも一つの動詞であるかのようにふるまうのである」（藤田 2009, pp.27, 28）という意見が出されている。

また、関係文法の考えによれば（La Fauci 1988）<sup>8</sup>、狭義の再帰動詞の構文の状態としては、始発層において名詞句の項に、1, 2の *multiattacco*（主語と直接目的語の両方の性質を持っている状態）を想定し、この項が最終的に1（主語）だけの性質の名詞句になり、2（直接目的語）としての性質はもはや出てこない、ということになる。

さらに、以前から、より実用的・教育的な立場の文法からも、「本質的再帰動詞は再帰代名詞がつかないときは他動詞です。つまり他動詞を自動的に使うには再帰動詞にすれば

---

<sup>6</sup> 例えば、Serianni 1988 は、再帰動詞 *forma riflessiva*（直訳すると「再帰形」となる）のことを「態」*diatesi* の一つと見ているようであるが、わが国で使われている教材などで、「再帰態」という用語が広く使われているようには見えない。

<sup>7</sup> 代名動詞の場合にも、似たように、「動詞と再帰代名詞が一緒になって1つの動詞となっている」という説明がなされるが、注7で述べるように、両者は異なるプロセスであり、混同するべきではない。

<sup>8</sup> これ以降、本稿ではしばしば、説明に関係文法の枠組みを利用しているが、これはたまたま山本がこの理論にいくらか馴染みがあるためとりあえずそうしたままで（いずれにせよ説明には何らかの理論的枠組みが必要なことから）、関係文法の特徴やその枠組みでないと説明できない事柄を述べるのが目的ではない（そこで扱われている事項は、おそらく他の文法理論を用いても大差なく説明が可能であると思われる）。関係文法の特徴やその利点・欠点についての筆者の意見を述べるのはまた別の機会に譲らねばならないが、簡単に言うと、山本は、この理論が、専門家でない読者にもわかりやすい簡潔さがあるとの印象を抱いている。

よいともいえましょう」(坂本 1979, p.115) というような主張も出てきている。ただ、残念なことに、坂本の説明では、この自動詞的用法の例として、*svegliare*「起こす」～*svegliarsi*「起きる」を挙げているので、「自分自身を ... する」の意味する狭義の再帰動詞 (例えば「体を洗う」*lavarsi*) と、「... という状態になる」を意味する代名動詞 (例えば「目を覚ます」*svegliarsi*) とを厳密に区別できていないように見える。<sup>9</sup> この混同は、少なからぬ数の教科書・文法書で認められ、しばしば、前者から転じて後者になるというような説明がなされている。<sup>10</sup> しかし、以下の議論では、たびたび混同されてきたこの2つのプロセス (どちらも確かに自動詞化には違いないが) を、きちんと区別をすることが重要になってくるであろう。

### 3. 狭義の再帰動詞による過去分詞の分詞構文

ここで、狭義の再帰動詞をどう解釈するかという問題と関連すると思われる現象を、1つ、取り上げてみたい。それは、過去分詞を使った分詞構文である。イタリア語の分詞の問題は、(再帰動詞にも関わってくる) 非対格仮説との関連で、特に性・数の一致 (過去分

<sup>9</sup> 関係文法の仕方の説明すると、既に見たように前者は始発層において名詞句の項に1, 2の *multiattacco* が想定されているのに対して、後者の場合には、始発層において名詞句の項には2が設定されていてこれが最終層では1になって出てくる (これがいわゆる非対格仮説の意味することである) という設定であり、両者は明らかに異なったプロセスである。関係文法で慣用的に使われている図式で表すと以下ようになる (なお、図式に加えて、矢印 → ⇒などで説明を付け加えておいたが、これは関係文法の慣用ではなく、山本独自の書き方である)。なお、p は述語動詞を表わす。

<i>mi lavo</i>	<i>mi sveglio</i>	
1, 2 p	2 p	← 始発層
1 p	1 p	← 最終層

<sup>10</sup> なお、山本 2010 では、この両者が混同されるに至った原因の一つは、理論的にはこのどちらの構造も取ることができると考えられる *alzarsi*「起きる」などの語の存在であると考えた。つまり、「自分自身を起こす (自分の身を起こす)」であれば、狭義の再帰動詞であり、「起きた状態になる」(状態変化)であれば、代名動詞であるが、結果としてどちらも意味は最終的には「起きる」となってしまい両者の違いは (少なくとも形の上では) 中和しまう。この中和が誤解を招いたのと考えた。

	中和	
「自分自身を起こす」	⇒	「起きる」
<i>mi alzo</i>		<i>mi alzo</i>
1, 2 p		2 p
1 p		1 p
		← 始発層
		← 最終層

詞が意味上の主語や直接目的語と性・数の一致をすること)の観点からたびたび取り上げられてきたが、分詞構文がこれから述べるような点から取り上げられたことは、おそらくまだ無いように見える。

さて、分詞構文には、よく知られているように、いわゆる「属詞的な」*attributivo* 分詞構文(分詞が、主節のどれかの要素と文法的に関係づけられており、それと性・数の一致をする)<sup>11</sup>と、独立分詞構文(分詞が、主節のいずれの要素とも文法的に関係づけられておらず、それと性・数の一致によって結び付けられてはいない)とがある。

(5) **arrivata in ritardo, Maria non fu ricevuta.** [属詞的な分詞構文]

arrived in delay Mary not was received

(Salvi - Vanelli 1992 p.145)

「遅れて着いたのでマリアは受け付けてもらえなかった」

(*arrivata* 動詞 *arrivare* 「到着する」の過去分詞女性単数, *non* 「...ない」否定の副詞, *fu ricevuta* 動詞 *essere* 「である」の遠過去3人称単数 *fu* と動詞 *ricevere* 「受け付ける」の過去分詞女性単数 *ricevuta* が一緒になって受動態「受け入れられた」)

(6) **costruita la casa, non ci rimaneva che traslocare.** [独立分詞構文]

built the house not to-us remained but to-relocate

「家が建ってあとは引越しをするだけであった」

(Salvi - Vanelli 1992, p.145)

(*costruita* 動詞 *costruire* 「到着する」の過去分詞女性単数, *la* 定冠詞女性単数形, *casa* 「家」女性名詞単数形, *non* 「...ない」否定の副詞, *ci* 「私たちに」人称代名詞一人称複数与格, *rimaneva* 「残っていた」動詞 *rimanere* 「残る」の直説法半過去3人称単数, *che* 接続詞「...しか」, *traslocare* 「引越すこと」動詞の不定詞)

さて、狭義の再帰動詞の場合は、どちらの分詞構文を構成しているのでしょうか。例えば、次のような例では：

(7) **Lavatosi uscì** 「(彼は)体を洗ってから外出した」

washed-himself he-went-out

(<http://it.answers.yahoo.com/question/index?qid=20110427084606AANb3wO>)

(*si* 再帰代名詞3人称[ここでは単数形], *lavato* 動詞 *lavare* 「洗う」の過去分詞男性単数形, *uscì* 動詞 *uscire* 「出る」の直説法遠過去3人称単数形)

<sup>11</sup> この用語は、Salvi - Vanelli 1992 に拠ってそれに若干の修正を加えたものである。紙面の都合上ごく簡単に説明すると、Salvi - Vanelli はこのような用法のことを、「属詞的な分詞構文と同じ統語論的特徴を持った構文」と呼んでいる (p.144) ので、本稿は、この用語を、彼らが定義したよりも、より拡張した意味で用いていることになる。

- (8) **Lavatasi, la donna sembra più bella**  
washed-herself the woman seems more beautiful

「その女性は、体を洗って、より美しくなったように見える」

([http://archive.org/stream/scltadicuriosit00zenagoog/scltadicuriosit00zenagoog\\_djvu.txt](http://archive.org/stream/scltadicuriosit00zenagoog/scltadicuriosit00zenagoog_djvu.txt))

(la 定冠詞女性単数形, donna 「女」 女性名詞単数形 sembra 「見える」 動詞 sembrare 「見える」の直説法現在 3 人称単数, più 副詞「より ...」, bella 「美しい」 形容詞 bello の女性単数形)

再帰代名詞を意味上の直接目的語と考えれば、「過去分詞＋意味上の直接目的語」の型の独立分詞構文であると考えられる。しかし、過去分詞は、主節の主語と性・数の一致をしているようにも見えるので、属詞的な分詞構文を構成していると解釈することもできそうである。

この両義性の原因の 1 つは、過去分詞の性・数の一致が、主節の主語と行われているのか、再帰代名詞と行われているのかが、語尾だけを見ては表面上は区別がつかないことである (直接目的語が再帰代名詞であり主節の主語と同じものを指すから、どちらと一致しても、語尾は同じになってしまうので)。そのため、語尾を見ただけでは、どちらの構文が現れているのかは区別がつかないことになる。

また、属詞的な分詞構文と独立分詞構文の両方が現れ得るという可能性も考えられるが、その場合にも、形の上で中和が起こっているのであれば、語尾からだけではどちらの構文が現れているのかを判断するのは難しいであろう。この問題に明確な答えをもたらすには、文脈やコロケーションなど、具体的な形に現れた証拠を探し出す困難な作業が必要であろう。

なお、ここで問題にしているのは、いずれにしても狭義の再帰動詞としての用法を想定してことであり、注 8 に述べたような、狭義の再帰動詞と代名動詞との間の中和とはまた異なるので注意されたい。にもかかわらず、狭義の再帰動詞と代名動詞との間の中和の問題と、属詞的な分詞構文と独立分詞構文との間の中和の問題とは、ある部分では交差していて、一方への取り組みが他方の解明に貢献できる可能性がある。再び *alzarsi* を例にとると、これが「自分自身を起こす」(再帰的)と「起きた状態になる」(代名動詞的)、の両方に解釈できるとすれば、これを分詞構文にした次のような場合、

- (8) **alzatisi, partirono.** (Renzi - Salvi 1991, p.244)  
awaken-themselves they-departed

「起きて彼らは出発した」

(si 再帰代名詞 3 人称 [ここでは複数形], *alzati* 動詞 *alzare* 「起こす」の過去分詞男性複数, *partirono* 動詞 *partire* 「出発する」の直説法遠過去 3 人称複数)

ここに代名動詞を認めるならば、この分詞構文は自動詞を使った属詞的なものとしか解釈できないであろうし、狭義の再帰動詞であると考えられる場合は、独立分詞構文 (*alzare* の過去分詞 *alzati* に直接目的語である *si* が付され、両者の間には性・数の一致が起こっていると考える) とともに、属詞的な分詞構文 (*alzarsi* 全体で1つの自動詞を構成していてその過去分詞が *alzatisi* であり、これは主節の主語と性・数の一致を起こしていると考えられる) とともに解釈できる可能性が出てくるであろう。

#### 4. 形式的再帰動詞

狭義の再帰動詞の場合と類似して、基本的には他動詞でありながらそこから外れた振る舞いをするものとして、いわゆる形式的再帰動詞「自分に関して (... を) ~ する」の構文を挙げることができる。これは、さまざまな意味での与格の代名詞が再帰代名詞として置かれているものである。それに加えて、多くの場合、同時に、直接目的語として一般的な名詞句あるいは人称代名詞を伴っていて、与格の再帰代名詞とこの直接目的語とは、さまざまな意味関係で多少とも密接に結びついている。例えば、

(9) **mi lavo la faccia** 「私は顔を洗う」  
to me I-wash the face

(*mi* 人称代名詞一人称単数与格 [ここでは再帰代名詞として機能している], *lavo* 「私は洗う」動詞 *lavare* 「洗う」の直説法現在1人称単数, *la* 定冠詞女性単数形, *faccia* 「顔」女性名詞単数形)

のような文では、洗う対象が「顔」*la faccia* で、その顔が誰のものであるかを人称代名詞与格「私」*mi* が表わしているが、この代名詞は主語と同じものを指している再帰代名詞として機能している。このような場合、この *la faccia* は直接目的語と考えられているようである。それは、次のような文を見ても明らかのように見える。

(10) **ti lavo la faccia** 「私は君の顔を洗ってあげる」  
to you I-wash the face

(<http://www.comix.it/ti-lavo-la-faccia>)

(*ti* 人称代名詞二人称単数与格, *lavo* 「私は洗う」動詞 *lavare* 「洗う」の直説法現在1人称単数, *la* 定冠詞女性単数形, *faccia* 「顔」女性名詞単数形)

(9) と (10) は、人称代名詞与格の部分が1人称単数か2人称単数かを除けば、同じ構造と語彙を持っているように見える。ならば、(10) で直接目的語であるものは(9) でも直接目的語であると考えるのは自然であろう (実は、形式的再帰動詞は、必ずこのような直接目的語表す一般的な名詞句あるいは人称代名詞を伴っていないわけではない、というわけで



はないのだが、<sup>12</sup> 以下、もっぱら直接目的語を伴っているケースを取り上げることとし、本稿では、別に断らない限りは、形式的再帰動詞の構文と言え意味上の直接目的語を伴っている構文のことだと御了解いただきたい。

形式的再帰動詞の構文は、直接目的語を伴うという意味では、その出発点に他動詞の構文があると考えられる。ところが、狭義の再帰動詞の場合と類似した形で、形式的再帰動詞も、普通の他動詞とは異なる振る舞いを見せる。複合時制の形成において助動詞として *essere* が選択されるのである。

(11) a. **mi lavo la faccia** 「私は顔を洗う」 [= (9)]

b. **mi sono lavato la faccia** 「私は顔を洗った」

to me I-am washed the face

(mi 人称代名詞一人称単数与格 [ここでは再帰代名詞], *lavato* 動詞 *lavare* 「洗う」の過去分詞男性単数, *sono* 動詞 *essere* 「...である」の直説法現在 1 人称単数 [ここでは助動詞], *la* 定冠詞女性単数形, *faccia* 「顔」女性名詞単数形)

こうして、形式的再帰動詞も、他動詞としての性質を持っていながら、再帰代名詞を伴っているために他動詞とは異なった扱いを受けていると言えよう。ここでも、狭義の再帰動詞の構文の場合と同じように、一種の自動詞化が行われていると考えることができそうだが、形式的再帰動詞の場合は、直接目的語は、再帰代名詞ではなくて、一般的な名詞句あるいは代名詞であるというところに注目したい。実は、この直接目的語も、正確には「意味上の直接目的語」と言うべきであろう。もし自動詞化が起こっているとすれば、文中の動詞はもはや他動詞ではなく、直接目的語も本来の直接目的語としての文法的役割をもちや果たしていないと考えられるからである。関係文法 (例えば La Fauci 1988) の枠組みでは、この意味上の直接目的語は、「失業者」(文法的役割を失った要素) であると見做されているが、<sup>13</sup> もはや直接目的語ではない、という意味では適切な捉え方であろう。

<sup>12</sup> 例えば、「自分自身に話しかける」*parlarsi* (*Intimamente mi sono parlato per tutta la giornata* 「私は、心の中で、一日中、自分自身に話しかけ続けた」 <http://alfianovecchio.wordpress.com/page/18/?from=145>) のような、間接目的語はあっても直接目的語がない例も、形式的再帰動詞の構文と言えられると思われる。ただ、ごく簡単に説明しておく(ここでは関係文法の方法で説明するがそのほかの文法理論でも基本的には大きな違いはないと思う) 直接目的語の失業という点を除けば、意味上の直接目的語を伴っていても伴ってなくても、形式的再帰動詞の基本的な枠組みは、同じメカニズム (1,2 の *multiattacco* の設定) によって説明可能だと思われる。

<sup>13</sup> 形式的再帰動詞の構文の構造を、*mi lavo le mani* 「私は手を洗う」を例にして関係文法で使われている図式で表すと、以下のようになる。なお、*cho* は失業者 *chômeur* を表わす。

## 5. 形式的再帰動詞の過去分詞による分詞構文

ところで、形式的再帰動詞は、過去分詞を用いた分詞構文を作ることができ、それは一見したところ、独立分詞構文のように見える。

(11) **Fabrizio, lavatosi le mani, si guardò intorno**  
 Fabrizio washed-himself the hands himself watched around

(<http://www.motocrossdepo.com/personaggi.php?id=1>)

「ファブリツィオは手を洗うと自分の周りを見渡した」

(Fabrizio 人名, lavato 動詞 lavare 「洗う」の過去分詞男性単数, si 再帰代名詞三人称 [ここでは単数形], guardò 動詞 guardare 「見る」の遠過去三人称単数形, intorno 「周りを」)

この場合、分詞の扱われ方は、形式的再帰動詞において起こっている自動詞化と符合することが期待されるが、さてどうであろうか。

普通の独立分詞構文では、過去分詞は、意味上の直接目的語（正確に言うとも直接目的語のみならず分詞となっている動詞の内項）と性・数の一致をする。しかし、一見したところ普通の独立分詞構文と大きな差は無いように見える形式的再帰動詞の構文においては、もし自動詞化が起きていると言えるならば、意味上の直接目的語を表わす名詞句も、もはや文法的には直接目的語ではないはずである。これは、過去分詞の性・数の一致に関しても、また異なった扱いを期待させる。

確かに、用例の多くは、そのような期待を裏切らないと思われる。つまり、(11) がまさにそうであるように、過去分詞の性・数の一致は、意味上の直接目的語を表わす名詞句とは行われず（これは、この名詞句がもはや文法的には直接目的語ではないことと符合している）、主節の主語との間に行われる（これは動詞が自動詞となっていることと符合している）、という形になっているのである。<sup>14</sup>

しかし、過去分詞の性・数の一致が、意味上の直接目的語を表わす名詞句との間でなされる用例も見つかり、これは、この名詞句が、いまなお直接目的語の性質を帯びているこ

---

mi	lavo	le mani	
1,3	p	2	← 始発層 1, 3 の multiattacco
1,2	p	cho	← 1,3 が 1,2 となり 2 だった名詞句が失業
1	p	cho	← 最終層, 2,3 がなくなり, 1 だけが残る

<sup>14</sup> ただし、意味上の直接目的語が接語形人称代名詞の形で表されている（この場合、分詞の末尾に前接することになる）場合には、義務的に直接目的語と過去分詞との間に性・数の一致が行われる。例えば、Lavatesele Paolo si coricò 「パオラはそれら（例えば両手 le mani [女性複数]）を洗ってから身を横たえた」(Salvi - Vanelli 2004) においては、(両手を指す) 人称代名詞 3 人称女性複数対格形 le と性・数の一致を起こして、過去分詞は lavate- と女性複数形になっている。

とを示しているようである。

- (12) **il medico, lavatesi le mani, visitò il paziente**  
the doctor washed-himself the hands visited the patient

(<http://www.valledolmo1.com/pagina0013.htm>)

「医者は、手を洗った後、患者を診た」

(il 定冠詞男性単数形, medico「医者」, lavate 動詞 lavare「洗う」の過去分詞女性複数, visitò 動詞 visitare「訪れる」の遠過去三人称単数, le 定冠詞女性複数形, mani「手」女性名詞 mano の複数形, paziente「患者」男性名詞単数形)

このように、形式的再帰動詞の分詞構文において、分詞とそれと関連付けられた要素との間の性・数の一致をめぐって二種類の異なった扱いが行われるということは、この構文の他動詞性の度合いの揺れを示しているのであろう。この点に関しては、Salvi - Vanelli 2004 のように、意味上の主語との性・数の一致のみを認めている文法書もあるほどなので、<sup>15</sup> 現象そのものの広がり (このような違いが、どんな要因 — 自由変異, 時代, 文体, 個人差, 地域差など — によるのか) について、いまだ詳細を尽くした議論がなされているとは言えないようである。<sup>16</sup>

## 6. 最後に

従来、イタリア語の伝統的な規範文法においては、狭義の再帰動詞および形式的再帰動詞の形態の問題は、(おそらく実用的な方面への気遣いが優先したために) もっぱら助動詞選択および性・数の一致のための指針 — 「**avere** ではなくて **essere** を使うのですよ！」とか「過去分詞は、主語と (あるいは直接目的語と)、性・数を一致させるのですよ！」など — という観点から取り上げられていたが、主に 1980 年代以降、助動詞選択・態・他動詞性など、さまざまな観点から、また、それらの間の論理的整合性の観点から、より科学的な側面に注意を払った考察が行われるようになってから新たな進展があり、研究が進んだと言えよう。

---

<sup>15</sup> より詳しく言うと、「手を洗ってからパオラは身をよこたえた」という意味の文として、Salvi - Vanelli 2004, p.84 は、Lavatasi le mani Paola si coricò. のみを挙げて、この場合、分詞は意味上の主語と性・数の一致をすると述べている。しかし、Salvi - Vanelli 1992, p.44 は、同様のケースについて、分詞は、性・数の一致を (意味上の主語とのほか) 意味上の直接目的語とすることもできるとして、lavatasi / lavatesi le mani Paola si coricò と 2 つの形を許容している。

<sup>16</sup> 実は、山本自身、この問題をゼミなどで取り上げ、卒業論文のテーマとして取り組んでみることを学生に勧めたことがあったが、残念ながら、ここで取り上げるに足るような成果は出てこなかった。

と同時に、本稿で取り上げたように、意外な所にまだ未解決の問題が残っている場合もあるのもまた事実である。理論のさらなる発展が望まれるのはもちろんだが、そもそも現象的な意味で、イタリア語の姿についてまだ知るべき事柄が多くあるのではないだろうか。特に、共通語の普及の歴史が浅いイタリア語に関しては、言語のバリエーションの問題は軽視できない（と同時に本格的な調査が難しい）問題であり、実際にイタリア人がどのようなイタリア語を話しているのかという問題に関しては、必ずしも正確なデータが揃っていないケースも少なくないと思われる。

そのような意味で、(現象を説明するための道具としての理論の研究はもちろん重要であるが) 言語現象そのものを常に観察し続けるという態度は、どんなに理論が進んでも不必要になることはなく、その重要性は強調してもし過ぎることはないであろう。

### 参考文献

言うまでもなく、本稿は、科学的・記述的な関心から書かれているため、近年出版されるに至った、数多くの、イタリア語の実用的習得を目的とした教科書を、ここで取り上げるのはあまり意味がないであろう。とは言え、考察の対象となっている現象が、教育的な観点からどのように見られてきたかということも、本稿の考察と全く無関係ではあり得ない。参考として、以下のリストでは、(研究書・研究論文、そして引用した文献に加えて)、教育的な目的の書籍のうち、レフェレンス的なものとして一定の評価を得ている、文法を多少なりとも組織的に解説してあるもの、あるいは文法についてより踏み込んだ考察を試みているものに限って、ごく少数のものを挙げてある(この方針と選択については、イタリア語教育に携わっている先生方には、おおむねご納得いただけるのではないかと思う)。

欧文

- BATTAGLIA, Giovanni, 1985. *Nuova grammatica italiana per stranieri*, illustrazioni di Asun Balzola, 8. ed., Bonacci Editore, Roma.
- BURZIO, Luigi, 1986. *Italian Syntax: A Government-Binding Approach*, Reidel, Dordrecht.
- CARDINALETTI, Anna, 2009. *si impersonale e dimostrativi: due casi di influenza dei dialetti sull'italiano?* in CARDINALETTI, Anna - MUNARO, Nicola, 2009, pp.29-54.
- CARDINALETTI, Anna - MUNARO, Nicola, (a cura di), 2009. *Italiano, italiani regionali e dialetti*, Franco Angeli, Milano.
- D'ALESSANDRO, Roberta, 2007. *Impersonal Si Constructions: Agreement and Interpretation* (Studies in Generative Grammar), Mouton de Gruyter, Berlin.
- DARDANO, Maurizio - TRIFONE, Pietro, 1997. *La nuova grammatica della lingua italiana*, Zanichelli, Bologna.

- GOIDANICH, Pier Gabriele, 1967. *Grammatica italiana*, IV edizione postuma con note aggiunte dell'autore ed una introduzione di L. Heilmann, Nicola Zanichelli editore, Bologna.
- KEYSER, Samuel Jay - ROEPER, Thomas, 1984. *On the middle and ergative constructions in English*, in *Linguistic Inquiry* 15, vol. 3, The MIT Press, pp.381-416.
- LAFUCCI, Nunzio, 1988. *Oggetti e soggetti nella formazione della morfosintassi romanza*, Giardini editori e stampatori, Pisa.
- LEPSCHY, Laura - LEPSCHY, Giulio, 1981. *La lingua italiana: storia varietà dell'uso, grammatica*, Bompiani, Roma.
- LOPEZ, Luis, 1994, *The Internal Structure of Absolute Small Clauses*, in *Catalan Work-ing Papers in Linguistics* (CatW PL) 4.1 '(1994):4 5-92, Universitat Autònoma de Barcelona
- RENZI, Lorenzo, (a cura di), 1991. *Grande grammatica italiana di consultazione*; vol. 1, *La Frase; I Sintagmi nominale e preposizionale*, Il Mulino, Bologna.
- RENZI, Lorenzo - SALVI, Giampaolo, (a cura di) [redazione a cura di Anna Cardinaletti], 1991. *Grande grammatica italiana di consultazione*; vol. 2, *I sintagmi verbale, aggettivale, avverbiale. La subordinazione*, Il Mulino, Bologna.
- REGULA, Moritz - JERNEJ, Josip, 1975. *Grammatica italiana descrittiva: su basi storiche e psicologiche*, 2.a ed. riveduta e ampliata, Francke, Bern; München.
- ROHLFS, Gerhardt, 1968. *Grammatica Storica della lingua italiana e dei suoi dialetti. Morfologia*, Einaudi, Torino.
- SALVI, Giampaolo - VANELLI, Laura, 1992. *Grammatica essenziale di riferimento della lingua italiana*, Istituto geografico De Agostini, Novara : Le Monnier, Firenze.
- SALVI, Giampaolo - VANELLI, Laura, 2004. *Nuova grammatica italiana*, Il Mulino, Bologna.
- SENSINI, Marcello, 1999. *La grammatica della lingua italiana. Guida alla conoscenza e all'uso dell'italiano scritto e parlato*, Mondadori, Milano.
- SERIANNI, Luca, 1988. *Grammatica italiana: italiano comune e lingua letteraria, suoni, forme, costrutti*, con la collaborazione di Alberto Castelvechi, UTET, Torino.
- PATOTA, Giuseppe, 2006. *Grammatica di riferimento dell'italiano contemporaneo*, Garzanti linguistica, Milano.
- SCHWARZE, Christoph, 2009. *Grammatica della lingua italiana*. Edizione italiana interamente riveduta dall'autore a cura di Adriano Colombo, 1a edizione italiana, Carocci editore, Roma.

和文

秋山余思. 1990. 「イタリア語辞書についてのいくつかの疑問 (その1)」『イタリア図書』5, pp.16-24.

小川定義. 1992. 「現代言語学の旗手たち 18 デイヴィッド・パールムッター David Perlmutter

- 正統派の統語論者」月刊『言語』, vol. 21, 6月号, pp.88-95.
- 木内良行. 2005. 『フランス語の統語論的研究 関係文法の限界と可能性』 大阪外国語大学言語社会学叢書第3輯 劉早書房.
- 小林一宏・清水憲男・松下直弘・Maria Yoldi・岡村一・吉川恵美子. 2003. 『詳解スペイン語』改訂・増補版, 上智大学出版.
- 小林惺. 1975. 『イタリア語小文法』 白水社.
- 小林惺. 2009. 『イタリア語文法ハンドブック』 第4刷, 白水社
- 坂本鉄男. 1979. 『現代イタリア文法』 白水社.
- 坂本鉄男. 1979. 『イタリア語の入門』 白水社 改訂第4刷 (初版 1969年).
- 菅田茂昭. 1989. 『現代イタリア語入門』 大学書林.
- 田所清克・伊藤奈希砂. 2004. 『現代ポルトガル文法』 白水社.
- 田原薫. 1992. 「困る‘ergative’の誤用」月刊『言語』, vol. 21, 7月号, p.137.
- 角田太作. 2007. 「他動性の研究の概略」角田三枝/佐々木冠/塩谷亨 編集「他動性の通言語的研究」くろしお出版, pp.1-11
- 長神悟. 1996. 『イタリア語のABC』 白水社.
- 安井泉. 1992. 「特集 現代言語学のトピック 3 “The door opens”<能格動詞と中間動詞>」月刊『言語』, vol. 21, 6月号, pp.32-35.
- 山本真司. 2010. 「イタリア語の中動態について (その2)」『東京外国語大学論集』第80号, pp.273-291.
- 藤田健. 2009. 「ロマンス語再帰代名詞の研究」北海道大学大学院文学研究科研究叢書14, 北海道大学出版会